

「お母さん、ボクお母さん居なくても頑張るから、お母さんも頑張っとな！」

22年前の手術のため、入院する朝のことです。いつものように学校へ向かう息子を角を曲がるまで見送るのが私の日課でした。前の日の夜、一緒にお風呂に入り、私のおっばいが無くなる事をはなし、そっと触れてお別れ「わかった」と一言、その翌日の言葉でした。

家を出て駆け出し、途中で急に立ち止まり、振り返って言ったのです。神経質で無口な小学校1年生の息子には精一杯の言葉掛けだったのでしょうか。私はその場で泣き崩れてしまい、死にたくない！この子のために生きたいと必死に思ったことを思い出します。

手術は大胸筋を残す全摘手術、リンパ節に転移も見つかるⅡ期との診断に放射線治療が必要との事。私は手術をしてもらっただけでも大仕事だと思っていただけに、更に放射線を受けるようにと言われ、何で私ばかりが・・・と涙する日々でした。

身体はそんなにきつくないのに精神的にどんどん落ち込んでいく私があります。何でもない元気でおられる人を見、「あなたはいいいね」と僻みさえでてしまう、どうせ私はもうすぐ死ぬんだからと考えて外に出なくなり、何もする気さえ起きなくなってしまったのです。

そんな中、半年程経った頃でしょうか、ある坊守さんが同じ病気で入院中に思うままに書かれた、一冊の詩集に出会ったのです。私は一気に読みきり、心が洗われる思いがし、衝撃を受けたのです。涙が止まりません。何という恥ずかしい私、心のちっぽけな私、このままじゃダメだと目が覚めました。

何かをしょう、残された日々の中で、私にだって出来ることがあるはず。40歳を前に看護師としての道を選び、皆に迷惑をかけながら卒業する事ができ、免許を頂き、現在も現役で頑張っています。

今こうして元気で当たり前の日常の生活が、幸せで居られることが本当にうれしい毎日です。一人で生きているのではなく、私に関わってくださる様々な人々によって生かされていると思える毎日なのです。

皆一人じゃないんだよ！